

## 社会学部報

◇ 昭和35年4月7日社会学部開部式を兼ねた入学式の席上で行われた関西学院院長・小宮孝教授、同大学長・堀経夫教授の式辞を次に記録としてとどめておきたい。

### 式 辞

学院長 小 宮 孝

このたび関西学院大学に社会学部が開設され、今日ここに皆さまとともに、かくも厳肅にその開部式を挙行することが出来ますことは、われわれの大なる喜びであるのみならず、わが学院大学の大いなる誇りとするものであります。社会学部は学内外の強い要望によって生れたものであります。私はこのことに対して、わが学院の長き歴史を通してすべてのことを今日に至るまで導き給うた神に感謝するとともに、社会学部の誕生は、わが学院の歴史にとって、次の三つの意味において特に意義深いものであることを強調したいと思います。

第一は、その歴史的な意味においてであります。関西学院が未だ大学にまで成長してはいなかったあのいわゆる「オールド関西」の時代の文学部には、河上丈太郎、新明正道、松沢兼人、小松堅太郎教授等のすぐれた社会学者や社会運動家が講壇に立たれていたことは周知の通りであります。また、キリスト教的立場から社会事業家の育成に対しても極めて熱心な関心がもたれていたのです。ジャーナリズムや社会運動の各方面に幾多のすぐれた人材を送り出したのもこの時代のことであります。これらのことを思うときに、今日の社会学部の精神的生命は、すでに「オールド関西」の肥沃な土壌にはぐくみ育てられていたともいえるのであります。この意味において、このたび社会学部が一学部として独立し、新しき発足をしたということは、わが学院の古き歴史と伝統の中にはぐくまれて来た生命が、その成長と貢献とに対してまことに相応しい場所を大学の中に与えられたという意味において、きわめて意義深いのであります。また、第二は、その学問的な意味においてであります。私は社会科学の一専攻者であります。私たちの構成体論的立場から申しますと、人間共同生活は次の三つの仕方において結合し存続しているものと考え、これらをゲマインシャフト、マハトシャフト、ヴィルトシャフトと呼んでいます。協同体、統治体、経済体の三つがこれらに当ります。そこで、社会科学にとっては、これら三つの仕方における人間共同生活の結合関係に対応して、これ

らのものをそれぞれ独自に研究することが要求されております。わが大学では、御承知の通り、法学部と経済学部とにおいて、第二のものと、第三のものに関する研究がすでになされております。そして、残されている第一のものの研究は、いうまでもなく、社会学部の仕事であります。そこでいま新しく一学部として社会学部が生れたということは、社会科学研究のきわめて重要にして根本的な三つの領域が、わが学院大学の学問的体系の中に、初めて全体としてそれぞれの場所を与えられたという意味において、まことに意義深いことと言わねばなりません。このことを考えますと、社会学部の誕生は、ただ単なる一学部の生誕とか、または大学の発展とかということだけではなく、もっと深い学問的な意味においてもその意義がきわめて大きいと考えます。

そして、最後に、申し上げたいのは、その実際の・社会的な意味についてであります。現代産業社会の問題は、ゆがめられた政治的権力関係と、ゆがめられた経済的利害関係とによって、協同体の存立の根底にあるべき正しき人間関係の喪失にあるといわれております。このような時代に社会学部が生れたということは、現代社会の強き要望にこたえるものであり、その意義と使命はきわめて大きいのであります。しかし、正しき人間関係の回復ということは、もはや単なる理論的研究だけでは不可能であります。現代社会のさまざまな矛盾と、それから生れるところの罪悪と貧困に対する戦いと同じように、そこには社会的責任の強き自覚と、使命感をもった実践者の熱情を必要といたします。キリスト教的「人間尊重」の精神こそわが学院の建学精神の根底であることをおもうとき、これらのすぐれた実践者を育成すべき使命と責任とが、社会学部に期待されていることを自覚しなければなりません。この意味においても、社会学部の誕生はまことに意義深いといわねばなりません。

以上、三つの意味において、社会学部の発足がわが学院にとって如何に意義深いかを述べました。もちろん、これ以外の面においても、その深い意義を考えることも出来ましょう。しかし、重要なことは、その意義の深いことを単に考えることではなくて、社会学部自身が自らの在り方を通して、その深い意義を実現してゆくことにあります。

社会学部の今後の発展を心から祈るとともに、その大いなる貢献を期待しております。

## 式 辞

大 学 長 堀 経 夫

本大学社会学部が正式に成立し、本日ここに開部式を挙げるに至りましたことは、まことに目出たい次第であります。既設の五学部はこの新学部を加えますと、本大学は六つの学部をもつ大学となり、文科系大学といたしましては、もうこれ以上に加える学部はない、と申してもよいほど、完備したものとなりました。因みに、この新学部の教員の陣容は、教授七名、助教授九名、講師五名、合計二十一名でありまして、その中、本学の文学部及びその他に勤務されていた方々は十名であり、新たにお迎えした方々は十一名であります。なおそのほかに助手二名、嘱託助手一名がおります。

そもそも、この社会学部は、本学院の伝統を生かしたものであると共に、時代の新しい要請に応えたものでありまして、この意味におきまして古くて新しくまた新しく古いの、学部である、ということができているのであります。すなわち、原田の森時代の本学院の専門部に社会学科なるものがありまして、ジャーナリズム及びその他の職域に、多数の優れた人材を送り出したのであります。その伝統が今日社会学部という形で再現したの

であります。しかもこの学部に含まるべき社会学、社会学部、新聞広報学、産業社会学などのコースは、いずれも時代の脚光を浴びている部門であり、また今後の発達が大いに期待されている学問分野であります。

さて、新しいという意味におきまして、本学部の先駆者の使命はすこぶる重大であります。殊に、わが国の大学におきまして社会学部という名の学部をもつものは、一、二しかなく、殊に関西におきましては、わが社会学部が最初のものである、ということを考え合わせますときに、その感が深いのであります。

また、古いという意味におきましては、本学部は、本学院の建学精神たるマスター・フォア・サーヴィスの発揚及び具現に最も近い諸学科目を含んでいる点に、留意すべきである、と思えます。

この新しく古くまた古くて新しい社会学部に所属する諸先生及び学生諸君におかれましては、以上の点に思いを致されまして、一致協力、学の内外に対して新学部の新しい意気込みを示し、もって本大学の社会的地位と信用を一段と高めるために重要な役割を果していただきたいのであります。

以上、簡単ながら、新しく発足いたしました社会学部の使命についての私の所懐を申し述べまして、式辞といたします。

- ◇ 昭和35年12月9日 学部研究会 発表者 田中国夫 助教授 発表題目 「新安保」に対する態度の因子分析的考察、発表終了後、大阪、東生園で懇親会を行った。
- ◇ 昭和36年1月13日 学部研究会 発表者 倉田和四生 講師 発表題目 かくれ切支丹の村落構造
- ◇ 昭和36年1月18日 社会学部完成年次変更認可
- ◇ 昭和36年2月6日 竹内愛二教授帰阪さる。 歴訪された国は米、加、伊、仏、英、オーストリア、

ア、スイス、パキスタン、セイロン、フィリッピン。イタリアでは第十回国際社会事業学校会議に参加。(農村社会事業部会の議長をつとめる)米、加では22社会事業学校及び約30実習機関(社会事業施設団体)訪問。

- ◇ 昭和36年3月3日 大学院視察をうける。
- ◇ 昭和36年2月 大道安次郎社会学部長は東北大学より文学博士の学位を授与された。テーマは「アメリカ社会学の源流」。

## 学 界 消 息

- ◇ 昭和35年11月2・3日、日本社会福祉学会が大阪社会事業短期大学で開催さる。竹内愛二教授は学会監事に任命された。尚、本大学にあった学会事務局は東京、日本社会事業大学に更迭された。
- ◇ 昭和35年12月4日。関西心理学会第67回大会が大阪学芸大学で開催さる。本学部からは田中国夫助教授が発表。